

福性寺



上東野照良師百回忌
田久保周譽師五十回忌記念誌

田久保圭譽編著



福性寺刊



上東野照良師

明治二十五年(1892年)五月五日生

大正十年(1921年)七月八日亡



田久保周譽師

明治三十九年(1906年)三月九日生
昭和五十四年(1979年)十月六日亡



江戸時代から関東大震災までの本堂
明治三十六年(1903年)の本堂
明治五年(1872年)の上知令文章の中で落慶時期は不明



関東大震災後の仮本堂
大正十四年(1925年)頃完成
昭和三十七年(1962年)までの本堂 昭和三十二年(1957年)頃撮影



現在の福性寺参道
昭和三十九年(1964年)落慶の現在の本堂と昭和五十四年(1979年)完成の山門

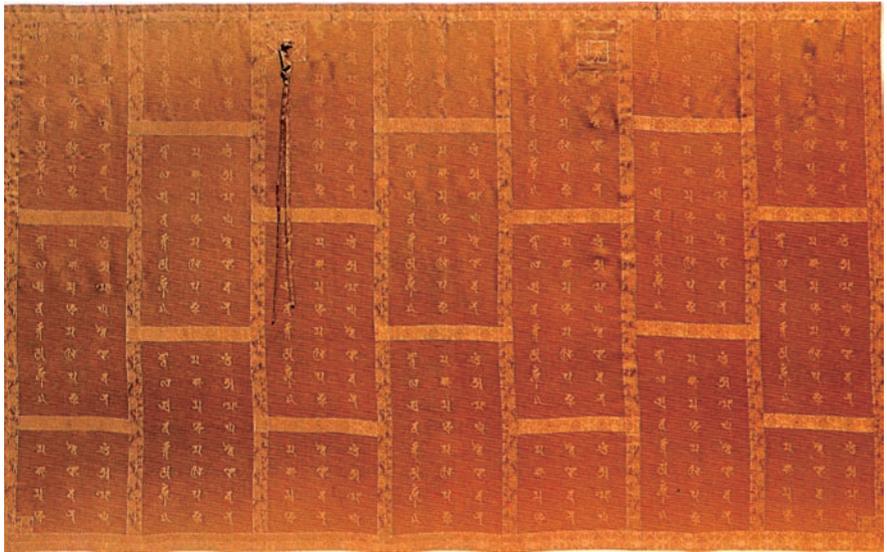


藤本饒譽師の常用經典
 藤本師大正六年(1917年)四月一日亡
 周譽師が好んで使用 版元の記載はありません

自智妙兼信女
玉容童子
光覺童子
清室妙恭信女
紅雲妙愛信女
松德妙光信女

大正拾年度
圓山自鏡信士
寒光妙芳信女
良圓信孩子
良信童子

上は大正五年(1916年)と下は大正十年(1921年)の福性寺過去帳
上東野照良師筆 亡くなるまで同様の筆跡が並んでいます



田久保周譽師筆光明真言織り込み如法衣(櫻山法衣店謹製)
昭和五十五年(1980年)十月六日



田久保周譽師

周譽師五十回忌、照良師百回忌

追悼コンサート



上東野照良師



出演

毎週月曜日20:00からBSHテレで放送の名歌名曲を歌い継ぐ番組

「BSH日本・こころの歌」に出演中のコーラスグループ

「女声フォレスタ」

演奏予定曲目

朧月夜、琵琶湖周航の歌、里の秋
あゝモンテルパの夜は更けて
惜別の歌、いい日旅立ち、地上の星 など

令和6年

12月15日(日)午後6時30分から

ホテル椿山荘東京「胡蝶」

東京都文京区関口1丁目 ☎03-3943-1111

午後2時から／周譽師五十回忌照良師百回忌「法要」福性寺本堂
午後5時から／「清宴」ホテル椿山荘東京「胡蝶」



連絡先: 福性寺 ☎03-3911-7701 Email: fukushoji.horifune@gmail.com <http://fukushoji-horifune.net/>

上東野照良師百回忌 田久保周譽師五十回忌法要追悼コンサートのチラシ
令和六年(2024年)十二月十五日

はじめに

真言宗豊山派東京第二号宗務支所下福性寺の住職であった上東野照良師の百回忌と田久保周譽師の五十回忌の施主を現住職の田久保海誉が務めます。宗派、組寺、ご法類ならびにお檀家の皆様のお陰であると現住職と家族一同は考えており、とても感謝しています。心よりお礼を申し上げます。

今回の法要を記念して副住職の田久保圭誉が小冊子を編集しました。特に大正大学名誉教授高橋尚夫先生から周譽師の学問的業績について文章をお願いし、ありがたいことにご寄稿頂くことができました。心からお礼を申し上げます。

高橋尚夫先生の文章のあとに、上東野照良師と田久保周譽師の生涯について、現住職の知るところを記録しました。

私が周譽師の著書業績などをまとめ、本書全体を編集しました。

以上をお読み頂くことができましたらとてもありがたいです。

表紙は長澤珠様 (nagasawamegumi@gmail.com) にお願いました。あまり型にはまったものではないようにして下さいとお願いました。

また、印刷製本は「福性寺の歴史」の1版から9版などでお世話になっている社会福祉法人東京コロニー・コロニー印刷様に依頼しました。特に同社の多田智信様 (t-oota@tocolo.or.jp) にはお世話になりました。記して感謝致します。

なお、校正は田久保光、田久保曜子、田久保有華と宮寺聖也師が行いました。

令和六年十月二十日

福性寺副住職 田久保圭誉

目 次

田久保周譽博士著作集 紹介

..... 大正大学名誉教授 高橋 尚夫先生 1

上東野照良師と田久保周譽師

..... 福性寺住職 田久保海譽 14

田久保周譽 著書業績集

..... 福性寺副住職 田久保圭譽 31

あとがきにかえて

..... 福性寺副住職 田久保圭譽 33

田久保周譽博士著作集 紹介

大正大学名誉教授 高橋 尚夫先生

田久保周譽先生は大正大学梵文学研究室ご出身で、わたくしは遙か後輩に当たります。先生の晩年になりましょうか、何度かお目にかかって、その警咳に触れ得たことは貴重な体験でありました。私は昭和38年に入学しまして、副手の頃でしたか、先生がひょっこり研究室に来られました。甚平姿で何処のおじさんだか途惑って対応させていただいた覚えがございます。その後、何度か梶原のご自坊にお邪魔させていただきました。そんなご縁で、ご子息の海誉先生から、周譽先生の御著作の紹介をするようご依頼がありました。先生の大部な著作を紹介する学力は持ち合わせておりませんが、ほんの一端のみ記させていただきます。

なお、余計なことですが、大正大学の梵文学研究室は現在廃止となって存在しません。その変遷は簡単に以下のようです。

大正大学梵文学研究室の変遷

- 大正15年 4月 梵文学研究室 荻原雲来主任
- 昭和 6年 4月 聖語学研究室 荻原雲来主任 田久保周譽副手(昭和8年)
- 昭和13年 4月 仏教学第二研究室 椎尾辨匡主任
- 昭和15年 4月 仏教学研究室と統合 椎尾辨匡主任
- 昭和21年 4月 印度仏教学研究室 山本快龍主任
- 昭和26年 4月 梵語学研究室 近藤隆晃主任
- 昭和27年 4月 梵文学研究室 近藤隆晃主任
- 昭和61年 4月 梵文学コース 石上善應主任
- 平成 5年 改組 文学部 国際文化学科 インド文化コース
人間学部 梵文学コース(平成4年度入学者のみ残留) 北条賢三主任

平成8年3月 人間学部 梵文学コース終了、インド文化コースも廃止
平成9年度より仏教学部仏教学科に統合（梵文学コース廃止・大学院のみコース選択）

以上簡単ですが、田久保先生は昭和8年に聖語学研究室副手をおつとめになっていらっしゃいます。

田久保周譽先生の著作は以下であります。

略歴 明治39年 千葉県に生れる。昭和6年 大正大学仏教学科卒、同13年聖語学研究室研究生終了。昭和54年10月6日遷化。詳しい経歴は7『業績集』にあります。

著書

- 1 『批判悉曇学』 真言宗豊山派宗務所、昭和19年、『校訂増補批判悉曇学』 昭和53年
- 2 『真言陀羅尼蔵の解説』 豊山派教育財団刊、昭和35年、増補再刊、昭和45年・昭和54年
- 3 『般若心経解説』 山喜房仏書林、昭和44年、校訂再版、昭和48年
- 4 『梵字入門』 有限会社豊山、昭和45年初版、五版発行(改訂)、令和3年
- 5 『梵文孔雀明王経』 山喜房仏書林、昭和47年
- 6 『敦煌出土 于闐語秘密經典集の研究』（博士論文）春秋社、昭和50年
- 7 『文学博士 田久保周譽大僧正業績集』 田久保博士業績集刊行会、昭和55年
- 8 『梵字 悉曇』（補筆 金山正好）平河出版社、1981年、七版発行、2005年

これら膨大な著作の紹介は私の能くするところではありませんが、以下、極簡単に記させていただきます。

1『批判悉曇学』真言宗豊山派宗務所、昭和19年、『校訂増補批判悉曇学』昭和53年

本書は二篇からなっております。第一篇はインドに於ける文字の変遷、アショーカ文字から現在のデーヴァナーガリー文字に至るまで、特に悉曇文字を中心にした字形学（パレオグラフィー）から始まり、悉曇学のすべてを網羅した重厚な論攷であり、難解をもって知られる。おそらく著者の三十代における著述で、その学識に圧倒される。本書の一般向けに著述されたのが遺稿となられた8『梵字 悉曇』である。

悉曇とは簡単にいえば、インドの児童がならう字母の手本であり、日本における五十音と軌を一にする。当然インドの訳経三蔵にとっては自明の理であり、あえて学習する必要は無い。しかし、梵語原典が中国語に翻訳され、密教経軌等で、真言や陀羅尼が梵字と漢字音写語とで頻繁に表されるようになると、翻訳経典のみで学習するものにとっては段々と難解となり、梵字の書写や音韻の学習が特記されるようになってきた。中国においてはまだ伝承は有効であったと思われるが、日本に伝わるとその伝承も段々に変じてきた。著者は次のように言う。

「本邦相承悉曇学は度々正統的領域を逸脱し、稍々日本的色彩を帯び、第二次的論議に行き過ぎた感がないではない。蓋し漢語を介して天竺語を習学し、且つ梵語学の著作に乏しい時代に在っては末梢的議論に固執して主体たる学の内容に変貌を来したのも避け得ない所であつたらう」（序説。旧字は新字に改めた）

このような従来の悉曇学に対して、現代の梵語学（サンスクリット）の発展に伴い、伝承を重んじつつも、明らかな写誤や誤謬は改め、訂正すべきであるというのが、「批判」の意味である。

改訂版には初版にない補遺が三編補充され、索引が附されていて便利である。

第二篇は「悉曇十八章建立」と云って、学習すべき悉曇文字がすべて印字されている。異体字が註記され、悉曇文字の学習に便利である。改

版には初版にはない「書体篇補遺」と「中国日本習用梵字」が収められている。また、慈雲尊者の梵字書体として、『阿訶囉あしつら (akṣara「文字」)帖』が附され、その解説は必読すべきである。

2 『真言陀羅尼藏の解説』 豊山派教育財団刊、昭和35年、増補再刊、昭和45年・昭和54年

中国訳経史上最大の翻訳者である玄奘三蔵がサンスクリットを漢訳するに当たって五種不翻の説を称えた。そのうちの第一に、「陀羅尼のような秘密の語」とあり、爾来、真言・陀羅尼は翻訳せずに原語を漢字で音写するに止めた。だからといって意味を知らなくてもよいというのではなく、音写語の後に割註で意味を附したり、音写語とは別に漢訳を施したのも少なからず存在する。しかし、時代が過ち、また日本に伝播するにつけ、真言・陀羅尼は尊い秘密のものとして、ただ唱えることのみには比重が置かれてきたと云っても過言ではない。そこには当然伝承の過誤が生じてきたことも否定できない。田久保先生は本書の総説で次のように述べている。

「此等真言の梵文批判に当たっては聖句の一音一句が宗教儀式の実践行動に直結しているので二者択一に当たっては許す限り相承を尊重することは言う迄もない。然し諸本比較に依って正統的形式が見出された場合には相承現形たりとも訂正するに憚らなかつた。蓋しこれは師資相承の間に於ける写誤・異伝であると推定して不可はあるまい。呪文聖語の意義解明と云う目標は新しい未開の研究分野である。然し真言密教が時代文化に追従し得る為には鮮明にして欣然と大衆の信解に供すべき一新資糧たるを失わない」(p.4.旧字は新字に改めた)

伝承を重んじることは当然のことながら、厳密な原典との比較研究の結果、正当な形が認められれば訂正すべきであるという、その先生の矜持は終始変わることなく、すべての著作に一貫した姿勢である。

本書は「第一章 真言成立の展望」と題して初期仏教から真言密教に

至るまで真言の成立を論じた膨大な論攷に始まり、常用実践真言、十八道真言、不動明王、伝法灌頂実践真言、梵唄、陀羅尼、護摩法の真言等々、真言・陀羅尼を網羅し解説を加えている。あまりにも詳細であるため初版では検索に困難を生じていたが、増補訂正版には索引が附され、文字通り真言・陀羅尼の宝典となっている。一般に真言と陀羅尼の違いは、短いのが真言で長いのが陀羅尼などと言われることが多いが、真言と陀羅尼とはその意義を別にする。そのことも本書では詳しく論じられている(pp.36-37)が、先生の『敦煌出土 于闐語秘密經典集の研究』に端的、明快に記されているので記しておく。

「思うに真言とは如来・菩薩・教令輪諸尊の本誓を吐露した聖句であり、陀羅尼とは一經、或いは一段の要旨を集約した聖句（陀羅尼・総持）として受持されたのが純正密教の本旨と評価される」（p.15）

3 『般若心經解説』 山喜房仏書林、昭和44年、校訂再版、昭和48年

2001年の第三刷では「『解説般若心經』 平河出版社」となっている。

戦後昭和二十七年ラジオ放送で絶大な人気を博した高神覚昇の『般若心經講義』（角川書店）を始め、中村元・紀野一義訳註『般若心經・金剛般若經』（昭和35年、岩波書店）が発刊されて以来、今日に至るまで般若心經の解説書は枚挙にいとまがなく、おそらく数百冊を数えるであろう。本書は華麗な梵字で頭書を飾り、厳密なサンスクリットの校訂、一一の単語の解説を含め、初心者にも読みやすく構成されている。類書の多くに見られる通俗的な解説ではなく、原典研究に基づいた要所の解説は深い示唆を与えてくれている。特に般若波羅蜜多とは単に空觀、中道を説くものではなく、そこに実践を伴うものであり、最後の「ギャーテーギャーテー・・・」の真言は般若波羅蜜多の行道を説くものであるとして、次のように訳されていることは傾聴にあたいするものである。

「行道よ、行道よ、彼岸に至る行道よ、彼岸に至るよき行道よ、さと

りの智慧よ、成就してあれ」

著書が行道（般若波羅蜜多の實踐）を中心に解説された本書の最後の一文を付しておきたいと思います。

「仏教の無我・空観は、常に思索と実践修行が併行して化導大衆の灯火となっていた。思うに私たちのわがままで貪欲な自我が、単なる学識や一片の思想でにわかに消滅し去るものではない。選ばれた天才は別のこと、大衆は絶えず崩れやすい基盤の上に立っているのである。般若経軌の所説のように、常に八不中道説の指向する諸法実相観を回想し、この思索を仮託した真言諷誦の禪定軌式を實踐し、空論を表徴した本尊行を観想して、いわゆる菩薩の波羅蜜多行道を進めることは、我々に一つの般若波羅蜜多信解の道を示すものである」

4 『梵字入門』 有限会社豊山、昭和45年初版、五版発行 (改訂)、令和3年

初心者向けの、梵字の歴史から始まって、書き順、発音、字義等の教科書として編纂されたもの。第五版では綴じ目が環状になっていて見開きやすく手本として手元に置くのに便利である。先生の悉曇文字に対する基本的立場を同書から引用すれば、

「かりに一字母に兩種の書体が歴史的に使用されているときは、伝承の書体を使用すべきであることは多言を要しない。しかし兩種字形の中で、たとえひとつがいわゆる相承の書体であろうとも、これが梵字書体学史（パレオグラフィ）の上から明白に否定される場合は、これを拒^{しりぞ}けて書体学の実証に従うべきである」

とある。このことは大著『批判悉曇学』や『真言陀羅尼蔵の解説』にも一貫した先生の厳密な学的立ち位置と言ってよいであろう。従って初級用といっても細心の注意をはらわれた中身の濃い入門書である。特に、日本語の五十音も悉曇から来たという最後の梵字五十音図は貴重である。

5 『梵文孔雀明王経』 山喜房仏書林、昭和47年

著者の序文の冒頭をかみ砕いて記せば以下のようなものである。

「孔雀明王に関する経軌は既に奈良時代には将来されていて、7世紀の半ばごろには河内国で孔雀明王法が修されたと伝えられている。弘法大師空海が弘仁2年（A.D.810）11月高雄山神護寺で鎮護国家の為に孔雀法を奉修された。元来此の経典は毒蛇を制した仏陀とその弟子スヴァーティを繞る仏陀伝とこれに次ぐ孔雀王本生話の両素材から展開したパリッタ（譬喩伝的呪詛）経典であるが、漸次に秘密仏教的性格を鮮明にし、護命・降雨・国土守護の祈祷経典に変形したものである」

この経典には、漢訳に六本、チベット訳、サンスクリットの八種類の資料が存在する。先にはオルデンブルクの校訂本（1899年）があるが、本書は東大写本四本、チベット訳、漢訳の比較研究に基づいた新たな校訂本であり、孔雀経に関する原典研究はすべて本書に依っている。京都大学の岩本裕博士による和訳も存在するが、岩本博士は独自に校訂した梵本（未公開）に基づいている¹。最近大正大学の犬塚伸夫博士によって成立問題についての詳細な研究がなされている²。ここでは、序文に記されている孔雀本生話の一部分のみ拙訳を試みた。なお、孔雀呪は全部で四十数種を数えるがドラミダ語で記されており、筆者には解読できない。ただ、第五番目の呪文のみサンスクリットで書かれているので参考までに訳しておく。

（p.2）私は次のように聞きました。あるとき、世尊はシュラーヴァステイー（舎衛城）の祇園精舎（祇樹給孤独園）において、偉大な比丘の集団と偉大な菩薩の集団とともに滞在しておられました。またその時、舎衛城の祇樹給孤独園にはスヴァーティという名の比丘が住んでおりました。初々しい青年で出家して間もなく、戒を受けたばかりで、

¹ 岩本裕「孔雀明王経」『仏教聖典選 第七巻 密教聖典』所収、読売新聞社、1975年

² 犬塚伸夫『インド初期密教成立過程の研究』春秋社、2013年

法や律を得て間もありませんでした。僧団のためにお風呂の薪を割っているとき、そのうちの腐った薪の孔から出てきた大きな黒蛇が右足の親指を咬みました。彼は体から力が抜けて大地に倒れました。口から泡を吹きつつ、眼を回して気を失ってしまいました。(p.3) 長老アーナンダは、苦しみ悶えながら激しく衰弱し、大地に倒れて泡を吹きつつ、眼を回して気を失ったスヴァーティという名の比丘を見ました。見て、大急ぎで世尊のおられるところに近づいて行きました。近づいて世尊の両足に頂礼し、一方に座り、アーナンダは世尊に次のように申し上げました。

『世尊よ、この舎衛城の祇樹給孤独園に、スヴァーティという名の比丘が住んでおります。初々しい青年で出家して間もなく、戒を受けたばかりで、法や律を得て間もないものです。僧団のためにお風呂の薪を割っているとき、そのうちの腐った薪の孔から出てきた大きな黒蛇が右足の親指を咬んだのです。彼は体から力が抜けて大地に倒れました。口から泡を吹きつつ、眼を回して気を失ってしまいました。世尊よ、私は彼に対してどのようにしたらよいでしょうか』。

世尊はこのように云われたとき、長老アーナンダに次のように仰せになった。

『アーナンダよ、汝は如来のこの言葉に従って行きなさい。[すなわち] 大孔雀明王 [呪] によって、スヴァーティ比丘の守護をなせ。保護・救助・擁護・安静・安穩等々をなせ。[後略』

呪文の5

(p.8) 「仏に帰依し奉る、法に帰依し奉る、僧に帰依し奉る。黄金に光り輝く孔雀王に帰依し奉る。大孔雀明王に帰依し奉る。すなわち、成就せるものよ、よく成就せるものよ、解き放つものよ、よく解き放つものよ、解き放されたものよ、よく解き放されたものよ、無垢なるものよ、離垢なるものよ、滅垢なるものよ、アンダレー パンダレー

吉祥なるものよ、幸運なるものよ、黄金よ、黄金を蔵するものよ、宝よ、宝を蔵するものよ、幸福なものよ、非常に幸福なものよ、全く幸福なものよ、すべての利益をもたらすものよ、最高の利益をもたらすものよ、すべての不幸を鎮めるものよ、すべての吉兆をもたらすものよ、すべての不吉兆を取り去るものよ、心あるものよ、意あるものよ、大いなる意あるものよ、希有なるものよ、非常に希有なるものよ、解き放たれたものよ、解き放つものよ、巧みに解き放つものよ、滅しないものよ、情欲のないものよ、情欲を離れたものよ、離垢なるものよ、不死なるものよ、不滅なるものよ、無死なるものよ、清浄なるものよ、清浄なる音声よ、満たしたものよ、本望を満たしたものよ、死者を蘇らせるものよ、吉祥なる幸福よ、月よ、月光よ、日よ、日水晶よ、離怖畏なるものよ、金色に輝くものよ、清らかな音響よ、清らかな尊主よ、(p.9) あらゆる処で損なわれないものよ、私を守護したまえ、守護したまえ、そして、すべての衆生たちに幸いあれかし、すべての仏に帰依し奉る、スヴァーティ比丘の、私の、そして、すべての衆生たちの安寧があれ、百年を生きて、百秋をみよ、フチ グチ ムチ スヴァーハー。」

なお、田久保先生による詳細な研究が『文学博士 田久保周誉大僧正業績集』に、『初期孔雀経類とその大乘的展開』（初出 豊山教学大会紀要第6号、昭和53年）として掲載されている。

6 『敦煌出土 于闐語秘密經典集の研究』（博士論文）春秋社、昭和50年

本書の序に次のようにある。先生の学問・恩師に対する切々たる心情が伝わって来る。

「本書の基本的研究対象となったものは同宗門の先輩久野芳隆教授が生前蒐集された資料である。著者が昭和21年中国から復員して幾許もなく御親族から生前教授に親近して教導を拝した縁故によってその秘

蔵した遺愛のマイクロ・フィルムを頂戴した。これらは教授が欧州留学中に苦心の末英国印度省図書館等で蒐集した梵漢蔵の仏教典籍を雑集したものであった。・・・以下略。

この著を世におくるに及んで特に亡き恩師荻原雲来博士並びに南溟の地に戦死して素志を遂げなかった敬愛する久野教授から永く拝受した提撕の学恩を回想し両尊霊に稽首し此の小著を嚆矢の資として捧げる。龍華三会の暁を俟たずして無上の導師に値遇することを得て研学求菩提に開眼し、仏慧の灯火を慕ってすごし得た前生に随喜感銘する」

昭和50年春 著者しるす

久野芳隆教授（明治31年10月東京芝生れ、昭和19年1月5日没。大正15年東京帝国大学文学部印度哲学科卒。昭和10年インド及び欧州留学、16年南方諸地域を視察。大正大学教授、台北帝国大学教授を務めた）が昭和14年に英国印度省図書館に所蔵されている于闐經典集のマイクロ・フィルムを入手し、保存されていたものの研究である。この中には六部の經典（典名は省略）が収集されており、その中のいくつかは個々に取り出され研究されているが、全体を一貫したものとして解明した珠玉の博士論文である。全体の半分ほどが『賢劫千仏名経』が占めている。

于闐とは、漢代における西域国の一つで、現在の和闐（Khotan）の地。かつてはシルクロード天山南路で文化・貿易の主要地であった。印欧語系の于闐語（Sakaサカ語ともいう）が使用された。5世紀頃には大乘仏教が栄え、7世紀には僧が五千人いたと伝えられている。于闐語の仏典には金剛般若経・金光明経などがあるが、中でも真言宗の読誦經典である『般若理趣経』の中の歎徳文が有名である。本書は、その六部の經典の原典写真、原典比較校訂、原典和訳、于闐語略文法、原典の字母書体、于闐語語彙が納められ、コータン語を学ぶものにとって大いなる指針となるものである。また、論説として「多仏思想」の研究が後半を占めている。

千仏名は、過去仏のクラクッチャンダ・カナカムニ・カーシャパ、現在仏のシャーキャムニの四仏と、弥勒を始めとする996の菩薩を数えるの

が普通であるが、この于闐語の「千仏名経」は上の四仏と未来仏である
マイトレーヤ（弥勒）の5名を別に出し、1005名を数えているのが一つ
の特徴であるという。

西域地方に千仏を描いた千仏洞が多く残されているのは千仏信仰が盛
んであったことを思わせる。この千仏信仰は密教の曼荼羅にも取り入れ
られ、金剛界曼荼羅には賢劫の千仏が描かれている。

7 『文学博士 田久保周誉大僧正業績集』 田久保博士業績 集刊行会、昭和55年

ご子息の田久保海誉先生によって、御遷化の後、編纂されたもので、御
著作以外の論文等を集めたもの、先生自筆の手沢本も含まれている。先
生の親友であられた故林亮海・元真言宗豊山派宗務総長の「序にかえて」
の一文は親身にあふれており、田久保先生のお人柄を彷彿とさせている。

数多の論文の内、豊山教学大会紀要に寄稿したものに以下の三点があ
る。ご逝去の前年まで研究発表をなされた先生の学問への情熱を訓戒と
して厳しく自戒する次第である。

「宗祖大師の悉曇学著作」豊山教学大会紀要第2号 昭和49年

「仏教文書による于闐語とその文字の考証」豊山教学大会紀要第3号
昭和50年

「初期孔雀経類とその大乘的展開」豊山教学大会紀要第6号 昭和53年

8 『梵字 悉曇』（補筆 金山正好）平河出版社、1981年、七 版発行、2005年

七版には初版にはない田久保先生の梵文般若心経の掛け軸と先生のカ
ラー写真が扉に増補されている。先生の絶筆となられたもので、先生
のご学友である金山正好師が補筆されている。梵字とか悉曇とかいうタイ
トルが付いているものは往々にして梵字の書き方を主体としたものが多
い中で、特に梵字の変遷を特出した論攷で学術的に高度な書物である。

以下、簡単に梵字・悉曇について述べておく。

梵字とは梵語（サンスクリット語）を書き表すのに用いる書体で、創造の神である梵天（ブラフマー）の作った文字と伝えられる所から梵字といわれるが、梵字の成立についてはこの梵天所造の他、龍宮相承説、釈迦所造説、大日相承説などがある。しかし、弘法大師が『梵字悉曇字母并釈義』で、「これこの文字は自然通理の所作なり」と述べているのが正しいであろう。但し歴史的にはセム系文字を母体としており、ローマ字ともよく似ているものがある。インドの文字は大きく分けて、カローシュティー（*karoṣṭhī*）型文字とブラーフミー（*brāhmī*）型文字の二系統があるが、字体には様々な変遷があり、ブラーフミー型の文字で、六～九世紀頃に流行したシッドマートリカー（*siddhamātrikā*）という書体が日本に伝わり、悉曇文字あるいは梵字といっている。現在インドで用いられている活字体はデーヴァナーガリー（*devanāgarī*）といい、十二、三世紀頃に確立されたものである。

悉曇とは梵語シッドダン（*siddham*）の音写語で完成という意味である。「成就」、「成就吉祥」などと訳される。狭義には梵字の書体と字母（アルファベット）を指し、広義には書体のほかに音韻や字義や梵語（サンスクリット語）の文法（八転声・六合釈）などを含めた悉曇学全体を指すこともある。通常、悉曇という場合は狭義の梵字の書体のことを指している。悉曇の呼称はシッドマートリカー（*siddhamātrikā*）という書体の名前から由来するとも考えられるが、インドでは六歳の童子が六ヶ月の間に梵語の字母を学習するといわれ、その手本の最初に「成就あれかし」（*siddhir astu*）とあり、それを「悉地羅卒都（しじらそと）」あるいは「悉曇羅卒都（しったんらそと）」と音写したところから悉曇の呼称がある。

なお、本書の後半には悉曇の読み方や字義、真言の解説などが附されており梵字・悉曇のオールマイティな書物となっている。弘法大師空海の『梵字悉曇字母并釈義』に、

「梵字は三世に亘って常恒なり。十方に遍じて以て不改なり。之れを学し、之れを書すれば定んで常住の仏智を得、之れを誦し之れを觀ずれば必ず不壞の法身を証す。諸教の根本、諸智の父母、蓋し此の字母に在り」

とあるように、大師は常に真言教徒は必ず梵学を納めるよう訓戒しておられる。必携の書物と言えよう。

記 一度ご自宅で田久保先生に伺った話であるが、五十数年も前のことであり、うろ覚えであるが、次のように仰っておられた。

「自分は学問を二度中断した。一つは戦争に召集されたことであり、一つは自坊の復興にずいぶんと歳月を費やした」

とのことである。先生は戦時中に『批判悉曇学』を上梓されたが、兵役に就き中断を余儀なくされた。また、戦後は御自坊の復興のため、これもやむなく中断せざるを得なかった。しかし、その後は精力的に、次々と研究成果を出版なされ、昭和47年には博士の学位を取得、昭和50年には博士論文を出版されている。また、御遷化の前年まで、学会発表をなさっておられた。筆者はその機会があったにもかかわらず、直接のご指導に預かることはなかった。いま御著作を拝見し、つくづく慚愧の念に堪えない。いま筆者の馬齢は先生の享年より遙かに超えている。怠惰な生活を叱咤されている思いで一杯である。

令和6年10月1日

上東野照良師と田久保周譽師

福性寺住職 田久保海誉

真言宗豊山派宗務所から上東野照良師の僧籍簿を平成27年3月11日に入手しました。この僧籍簿をもとに記述します。一部は「福性寺の歴史第9版」と重複する記述があります。お許してください。

かとうのしょうりょう 上東野照良師

上東野師の故郷

上東野師は明治25年（1892年）5月5日に生まれました。千葉県二宮町が本籍地です。現在、船橋市東部で東前原と西前原を含むあたりです。

上東野師の生家は、現在の千葉県の船橋市と習志野市を通る御成街道（国道69号線）と成田街道（269号）の丁度分岐点（成田街道入り口）にありました。現在は、船橋市前原西です。JR津田沼駅から北西に700mです。飲み物と食べ物のある茶店のような場所でした。現在は、コンビニエンスストアとなっているあたりです。

上東野師は地元の小学校に通ったものと思われます。次に佐倉市の真言宗豊山派の実蔵院内にあった私立明倫中学校に2年間在籍しました。当時の実蔵院住職の山内永隆師が明倫中学校を明治36年（1903年）から昭和17年（1942年）まで境内で開き、地域の教育に貢献しました。もちろん、この学校は弘法大師空海和尚の綜芸種智院にあやかっただけです。上東野師は仏教的な雰囲気の中で学びました。

この学校の設立は、農村の振興を担う後継者を養成することが目的でした。最盛期には1学年500人を超えたと言われています。その後、昭和恐慌、農村不況の深刻化により生徒が集まらず、昭和17年（1942年）第37回卒業生を最後として40年の歴史を閉じました。昭和恐慌は昭和5年

(1930年) から始まっています。なお、深刻な農村の不況を背景とした2・26事件は昭和11年(1936年)です。

上東野師と仏門

京成電鉄は、東京方面から海神駅までの開通が大正8年(1919年)、大正15年(1926年)に成田山新勝寺の近くまで開業しています。上東野師が福性寺に入寺するころ(大正6年)には、実家の近くまで京成電鉄が使えるようになり、亡くなってから成田山まで開通しました。

このため、子供のころの上東野師は徒歩で成田詣でをする熱心な成田不動信者や大師(弘法大師)信者の人々を見ていたのでしょう。江戸の町には500以上の成田講があり、明治時代になっても船橋宿は各街道の分岐点であり各種の商店や業態の異なる宿があり、殷賑をきわめました。

明治40年(1907年)に八街市にある真言宗智山派成田山不動院(成田山新勝寺八街分院)に入寺しています。得度(とくど、僧侶となるための出家の儀式)は明治43年(1910年)、四度加行は明治43年、灌頂の受者は大正3年(1914年)です。全て真言宗智山派の寺で行われています。成田山新勝寺の系統です。このため、上東野師は成田山系統の僧侶名です。

上東野師の豊山派への転派と福性寺住職就任

大正5年(1916年)2月に真言宗智山派から豊山派に転派します。その理由は、福性寺の住職になるためでしょう。法類会長の鳥居愼譽猊下にお聞きしたことがあります。「この時代の宗派はあいまいだったので」とのことです。しかし、具体的な転派に関するお話はご存じありませんでした。

豊山派における師僧は藤本饒譽師(大正6年4月1日遷化)です。このため、福性寺には藤本師の常用経典が遺品(写真)としてあります。上東野師から周譽師そして私に伝わっています。

上東野師は、福性寺の本寺である隅田川の対岸にある恵命寺から巢鴨

の眞性寺の住職となっていた藤本饒譽師の弟子となったので、当然、師僧であった藤本師は、恵命寺の末寺であった福性寺をよくしっていたと思われる。転派や福性寺の住職の就任に、大きな役割を果たしたと思われる。しかし、藤本師と上東野師の間にどのような経緯があったのか不明です。

藤本師について、少しふれます。鳥居愼譽猥下（平成22年9月）によると、藤本師は深川吉祥院、湯島円満院、足立区江北（旧、沼田）恵命寺、北区豊島西福寺と巢鴨眞性寺（二十三世）の住職をつとめ、人望のある大徳でした。墓所は眞性寺にあります。子供はいません。

上東野師は福性寺の住職には、転派した翌年、大正6年（1917年）4月10日に拜命しましたから、藤本師の死亡の9日後の拜命でした。豊山派への転派から1年余りの後に、無住職であった福性寺の住職になったこととなります。24歳の時です。

しかし、過去帳を見ると、大正5年（1916年）12月から上東野師の命日までの全てのお戒名は、上東野師による伸びやかで丁寧な字で書かれています(写真)。住職拜命前の5か月前から福性寺にすでに住んで住職としての役割を果たしていたようです。

その後、亡くなるまで、4年余りを福性寺で過ごしました。僧階は、律師から死亡後に権少僧都となっています。

また、法類関係で言うと、藤本饒譽師の3人の弟子の1人ということになります。眞性寺の清水教譽猥下と清光寺の新井泰譽師の兄弟弟子です。大正5年（1916年）2月に転派した後、大正5年（1916年）12月に福性寺に入寺するまで、恵命寺か眞性寺にいたのか不明です。しかし、長く法類寺院に隨身をしたことはありませんでした。鳥居愼譽猥下からは「依法類と言うこともできると思います」とお聞きしました。

福性寺は幕末（1851年ごろ）から上東野師の赴任までは、無住職の寺でした。福性寺には上東野師の大正時代のお墓があり、周譽師の昭和時代のお墓もあります。歴代住職の墓所を見ても、明治時代にこの寺で亡

くなり、福性寺に葬られた住職はいません。

上東野師は大正10年（1921年）7月8日に亡くなりました。29歳でした。

上東野師についての伝聞

周譽師から何度も上東野師の名前を聞きました。しかし、多くの内容をよく覚えていません。以下は周譽師から聞きました。上東野師は結核に伴う咯血で夜間に亡くなりました。夫人は上東野師が息を引き取った後、咯血の始末をして清潔にしてから睡眠中の周譽師を起こしました。なかなか昔の夫人は強い人がいたようです。結核という病気が身近であったのでしょうか。

上東野師の死後、夫人は実家のある新潟県の柏崎に帰り、寺の住職の後妻になったと聞きました。また、全ての上東野師に関する祭祀を周譽師に任せました。このため、上東野師の回忌法要は、周譽師や私が施主で行って来ました。また、福性寺を発展させることが上東野師から私どもの家庭に託された遺言と考えています。

上東野師は、野菜は小松菜を食べることを指示していたそうです。小松菜は当時もっとも安価な野菜であったとのこと。今でも、福性寺では正月に一度は小松菜のお雑煮を食べる習慣があります。

周譽師は私と車に乗っている時、小松菜畑で働いている人をみると、買ってくるようにと何度か言われたことがあります。車を停めて何度か買いに行ったことがあります。農家出身ですから遠くから見ても、野菜の種類がよくわかったようです。

法類の小松原賢譽下からは「とても長身であった」と聞きました。背が高いので「半鐘泥棒とあだ名をつけた」との冗談を聞きました。

お檀家からは、上東野師のお名前は、堀江定都様から一度と長谷川志げ（変体仮名）様から二度聞きました。堀江定都様からは、周譽師との会話のなかで「田久保さんとは違って、上東野さんは静かだったよね」

と子供のころに聞きました。周譽師は大笑いをしていました。

長谷川志げ様からは、私が成人してから聞きました。上東野師は病身であったためか「料理よりも、自分ではできない庭のお掃除を宜しく」と夫人に言っていたそうです。また上東野師の奥様のご出身についてお話になっていました。

長谷川様は周譽師のことを「文ちゃん」と子供時代の名前、文吉で呼んでいました。長谷川様は福性寺の留守番役でした。また、上東野師の死後も、鳥居敬譽師が着任するまで、福性寺の留守番をしていました。このため境内掃除もしていました。現在の福性寺の銀杏の木を手でゆすって葉を落として掃除をしていたと私に話していました。現在の幹の直径50cmの大木が手でゆすることのできる細い木であったわけです。

上東野師と周譽師の親戚関係

以下、周譽師を父とも呼びます。父は津田沼（習志野市）の農家の生まれでした。明治39年(1906年)3月9日が誕生日です。次男でした。父の叔父の家庭の養子となっていました。叔父は、実父の弟で、でん粉工場を経営していました。ちなみに、さつまいもでん粉の発祥地は下総の国、千葉県です。

しかし、その叔父に実子である田久保友吉様が産まれたことから、養子先から実家に帰っていました。父は実父と養父の二人から援助を受けていたようです。

その後、大正9年(1920年)3月25日に福性寺に入寺しました。田久保友吉様の母の兄弟、血のつながらない叔父、つまり叔父夫人の兄弟である上東野師が、大正6年(正式赴任)から福性寺の住職を務めていた縁によります。

福性寺を継ぐように周譽師は上東野師から頼まれていました。上東野師は病気(肺結核)のために子供がいないことから、後継者になるように頼まれました。東京の旧制中学や大学で勉強ができることから、寺の

後継者になったと周譽師は話していました。

しかし、上東野師の早逝により、周譽師は1年3カ月ほどを上東野師と福性寺で生活したことになります。数年後には就職資格を得ることができました。

たくぼしうよ 田久保周譽師

周譽師の故郷

父の生家は、千葉県習志野市藤崎にあります。JR津田沼駅の西500mの藤崎墓地の前にあります。農家でした。御成街道（国道69号）に面しています。

上東野師の実家から1.5Km、歩いて20分でしょうか。すでに書きましたが明治39年（1906年）生まれです。地元の津田沼尋常小学校で学び、高等小学校で1年間学んでいます。その後、大正8年（1919年）に習志野市藤崎の真言宗豊山派正福寺内にあった3学年制の私立弘文学校に入学しています。1年間学びました。校長は川島晃阿師でした。この学校は大正4年開校し昭和16年閉校しました。川島師のお弟子が福性寺から大正大学に通いました。昭和8年ごろには、70名ほどの生徒が在籍し中学校に準じた教科内容が行われていました。本堂を校舎としていましたが、昭和3年には、新校舎が完成しています。国語、漢文、英語、数学を授業していました。千葉県では多くの寺が寺子屋を開設し明治時代には小学校となっていました。

藤崎の叔父の家を訪問した時、遠くの田を眺めながら「丸い火が横走りする時があってね」「狐の嫁入り」と言っていたと話していました。父から「科学的には何なんだい」と尋ねられたことがあります。それほどの田舎でした。

周譽師の福性寺に入寺後

その後、大正9年（1920年）に福性寺に入寺しました。入寺に関して

は、上東野師との親戚関係に書きました。大正9年に得度、度牒（得度の証明）、大正10年に豊山中学入学までを見とどけて上東野師は亡くなりました。しかし、周譽師が住職資格をとる前に、上東野師が亡くなりました（大正10年）。

大正12年（1923年）9月1日の関東大震災は眞性寺で迎えました。この時、江戸時代からの福性寺の本堂は倒壊しましたが、詳細を聞いたことはありません。ただ、江戸時代からの茅葺き屋根を震災の前に瓦ぶきにしたと話していました。

上東野師の遷化後

上東野師の遷化後、巢鴨の眞性寺の清水教譽猷下（上東野師の兄弟子）の弟子となりました。父は自らを評して「もらいっ子癖がついていた」と笑って私に話したことがあります。これは、叔父の養子となり、上東野師の後継者であり福性寺の住職の候補者となり、次に眞性寺の清水教譽猷下の弟子になったからです。

以後、二十年間近く福性寺に復帰はかないませんでした。この間、父は何ヶ所かの寺の住職になるようにご法類から依頼されました。しかし、福性寺の住職になることを以下の二つの理由から待っていました。

大正大学から遠距離にある寺の住職になっては、大正大学の聖語学（サンスクリット、パーリ語、チベット語などを研究）研究室に通えなくなるからです。つまり、恩師の荻原雲来教授（梵語学の世界的権威者）や久野芳隆教授（台北帝国大学教授、昭和19年に飛行機事故で死亡）の教えを受けるためでした。

また、上東野師のお墓を守るためでした。上東野師夫人から、福性寺の後継者になることと、すでに書いたとおり上東野師のただ一人の弟子として、一切の上東野師の祭祀と供養を任されたからです。

子供のころから父が上東野師の墓前で季節や時刻にかかわらず、般若心経を読むことを何度も見ました。多分、相談事や寺のできごとを報告

していたのであろうと考えています。

眞性寺での生活

清水教譽猷下は名利の住職であり沢山の弟子を抱えていました。しかし、生活は本当に質素であったようです。食事は一汁一菜が基本です。必ず周譽師たち弟子と一緒に同じ食事をしていました。飲酒することもなかったそうです。地方出身の父が眞性寺の食事のあまりの質素さに驚いたそうです。このため、時おり実父や養父であったことのある叔父に浅草に連れ出してもらい、井物をご馳走になることが楽しみだったと聞きました。実父と養父は、でん粉工場の経営から少しだけ裕福であったようです。

父は眞性寺時代に高熱を出してから勉強が好きになったようです。鳥居敬譽猷下から父の年回忌法要のたびに、ご挨拶の中でお聞きしました。また、父の死後、私も敬譽猷下から「田久保（海誉）君！熱が出ると頭がよくなることあるの？」と冗談をお聞きしました。

父は大学ではサンスクリット（梵語）を深く学ぶようになりました。当時からサンスクリットの書物（洋書）は非常に高価でした。しかし、父が購入希望の本を清水猷下にお問い合わせすると、価格のいかんにかかわらず即座に代金を頂けたそうです。このため、父は旧制の大学院時代にも、本代を考えることなく勉強に打ち込めたと話していました。常に節約を心がけ、必要な時には十分にお金を使うことが清水猷下の哲学だったようです。

私が子供のころ、父に連れられて、三念寺様にお邪魔して、清水猷下と三念寺様の内陣の写真を撮影したことがあります。また、高校生になってから、福性寺を私に継がせたいと父は清水猷下にお話をしていました。

昭和12年（1937年）の父母の結婚後は、巢鴨の長屋住まいでした。それでも、母は東京の寺の住職予定者と結婚したので、「出世した」と周囲から言われていたようです。

昭和15年3月の正式な福性寺への着任前は、父が巢鴨の眞性寺の院代を務めていました。父は昭和7年に福性寺住職後任候補者、8年には住職に就任していましたが着任していませんでした。

周譽師の福性寺着任

父が福性寺に着任したころは、大学や宗派による奨学生として、ヨーロッパ留学の順番が回って来ていました。しかし、先の大戦と戦後のどさくさのために、外国でエトランゼ生活をする事ができませんでした。この点は、非常に残念に思っていたようです。私にどのような学問をするにしろ、留学の夢を託していました。私に意義のある留学を必ずするようにと言い残していました。しかし、父の死後、すぐに私が住職になりましたので、留学を諦めていました。平成になったころ、東京都老人医療センター病理部への異動と留学のセットのお話が東京都老人医療センター病理部長の江崎行芳先生からありました。この時、父の遺志を知っている母は、強く私に留学を勧め、私の留学の間は自分が寺を守るからと言いました。ニュージーランド国のオークランド大学名誉客員教授として外国生活をおくることができました。

昭和15年（1940年）に父が福性寺に着任すると、客間の玄関の戸にはガラスがなく風が吹き込み、また、家の庇は、板張りのひどく整備のされていない寺だったようです。

本堂は関東大震災で全壊した後の仮本堂でした。お檀家の数も現在の数分の一で、百軒ほどでした。結婚後も父は、当時、満洲と北シと呼ばれた中国大陸の地方へ「警備召集」（補充兵や予備役軍人を徴用して重要な場所の警備に当たらせていました）で出かけていました。この時代の軍歴は、メモ帳に自筆の鉛筆書きで残っています。合計で3年11カ月です。

この時代（日中戦争から昭和21年）の母の自慢は、たった一人で娘2人を育てながら、寺を守ったことです。戦死者の増加で寺はいそがしくなる一方、父は不在でした。このため、お檀家のご葬儀や法事のために、

お経を読んで頂ける僧侶を探すことが大変だったらしいです。また、お布施による収入が母の手許や福性寺には残らないことから、経済的にもつらかったようです。

米軍の空襲時には、ご本尊様を防空壕の最も深いところに安置して、母や姉二人は防空壕の入り口側にいたそうです。江戸時代の初めに建立された大日如来様を守ったことも母の自慢でした。福性寺の防空壕は、なぜか母が女手一人で作った粗末なものだったらしいです。

大正時代から昭和20年（1945年）にかけての福性寺の過去帳は、寺で最も重要な書類と言うことで、父の留守のためにご本寺の眞性寺様にお預かり頂きました。このため、4月13日の空襲による眞性寺様の火災のために焼失しました。この時代の福性寺の過去帳は、父と母が墓地をめぐり、お戒名と俗名を集めた不完全な過去帳です。

父の出版した著書「批判悉曇学」は、母の実家である三郷市の延命院に母がリアカーで運び疎開させました。これらの著書を守ったことも母の自慢でした。

敗戦後

戦後、父は旧満州からシベリアに抑留されたとの噂うわさがあったようです。原隊から旧満州に出張命令があったため、このような噂があったようです。しかし、昭和21年4月に父は復員しました。青島チンタオから米軍の上陸用舟艇で佐世保港に上がり、鉄道で王子駅に帰ってきたとのこと。

空襲により民家が焼失し、王子駅のホームから福性寺の旧本堂を直接見ることができて、本当に父はうれしかったようです。

復員当日、寺に着いて庫裡くら（住職住まい）で一服したのち、早々に境内を見回ろうとすると、紀子姉が「おじさん帰るの」と父に尋ねたそうです。

父は敗戦後の日本社会になじめないところがあったと思います。特にGHQ（連合軍最高司令官総司令部）や米軍による敗戦前の大日本帝

国の欠点ばかりを強調するプロパガンダや、長期間にわたり検閲された新聞報道に対して、誇張や嘘が多いとよく話していました。

たびたび、過去の日本国と日本人について、長所も欠点も私に話していました。占領下のGHQの検閲や、押し曲げられた新聞報道など、我々を知るべきことは多いと考えています。

牧田平次郎様の次女、安川睦子様によると、父の帰国後は、寺では緑陰子供会、幻燈会、青年会、書道教室が開かれ、父も母も大変いそがしかったようです。母の百人一首のカルタ会もあったようです。

昭和23年ごろから、青年会の皆さんと一緒に、梶原や堀船の歴史などの調査が行われました。これは堀船の町に住む多くの有力者の依頼により郷土史を作るためでした。

「堀船郷土史発行協賛会」が作られ、町全体の事業となりました。父が執筆を依頼されました。昭和27年(1952年)6月に周譽師の手により「堀船郷土史」が発刊となりました。この本は今に至るも、日刊紙などにとり上げられ、堀船の歴史を知るための基礎的な資料となっています。この時代に「民衆史」を発行したことで評価されているようです。この本を求める人が多くなり、平成24年9月に復刻版を無料配布しました。平成28年10月に「堀船郷土史平成増補版」(田久保周譽著、堀船郷土史を語る会編)が発行されました。

「堀船郷土史平成増補版」では、北区飛鳥山図書館の諸先生に執筆を依頼し、「堀船郷土史を語る会」などの成果を追加し、堀船にある大会社の記事を掲載しました。

福性寺から大学に通学した諸師

周譽師の時代には、習志野市正福寺の川島晃阿師のお弟子様、郡山市阿弥陀寺の小田弘毅師、八潮市宝幢寺の平本省吾師、三郷市延命院の石井秀誉師、栃木県藤岡町福寿院の矢田正幸師、福島県矢吹町正福寺の星俊光師などが大学や大学院に通学しました。できるだけ学費を援助した

いと考えていたようです。また、父の遷化直後も榎本博司師が隨身してきました。

特に矢田正幸師には、父の死後、本山からお帰り頂き長い期間にわたって福性寺の法務を手伝って頂きました。また、榎本博司師には仏教と真言宗の教学をご教授頂いています。

その後も足利市満宝寺の後藤信夫師、八潮市福寿院の宮本宥慶師、福島県北塩原村松音寺の林賢乗師、秩父市の横田渉全師と現在の木更津市高蔵寺の宮寺聖也師が職員として法務を手伝って頂いています。

福性寺着任当時の総代様とお檀家

福性寺に入寺した当時や着任当時は、大郷彌太郎様（仮本堂建設）、堀江傳三郎様、石井與四郎様、堀江平次郎様、堀江松五郎様、堀江勇右衛門様やその他の地域の有力者であった堀江清勝様、石井惣吉様（梶原渡し開設）、石井鋳右衛門様、石井清次郎様、堀江榮太郎様、石井茂吉様（写真植字機発明）などにお世話になりました。

本堂の落成式では、堀江勇右衛門様、石井英四郎様、堀江松五郎様を継いだ堀江恒太郎様の記念写真があります。本堂の寄付の会計係は福田寅雄様と小宮武雄様でした。永代経料は、堀江松五郎様、石井與五郎様、石井茂吉様、小宮武雄様、小宮和男様、高橋稻様、峯岸平吉様、堀江勇右衛門様、福田寅雄様、堀江康夫様、石井英四郎様、小泉寿男様、三原満様、小泉一義様が奉納しています。

客殿の建設時の総代様は、堀江勇右衛門様、石井與五郎様、石井英四郎様、堀江恒太郎様でした。

山門建設時の総代様は、石井與五郎様、堀江恒太郎様、堀江勇治様と小宮武雄様でした。

文学博士と大僧正就任と学問

梵語サンスクリットは、イギリス、ドイツ、スウェーデンなどヨーロッ

パ諸国で先行して研究が盛んでした。また、現代でもインドでは公用語のひとつです。このため、父は英語、ドイツ語やフランス語をよく知っていました。父が私の受験勉強を覗きに來た時、would should couldの使い方や意味を私よりもよく知っていました。

昭和47年（1972年）3月15日に父が文学博士号を頂いた時には、地域の皆様がお祝いの会を開いてくれました（昭和47年4月8日）。北区議会議員の和田武志先生、藤田辰之助先生や多くの地域の皆様、小学校、中学校の先生も出席されました。

父は文学博士や大僧正（昭和53年5月）になる希望のない人でした。書齋で、サンスクリット、チベット語、漢文、英語、フランス語、ドイツ語で書かれた仏教の原典や學術書を読むことを楽しんでいました。

しかし、原典研究に関しては渾身の努力をしていました。法務のない日は、毎日朝9時過ぎから昼食時間を除いて6時の夕食前まで書齋にこもりきりでした。なぜ一生懸命本を読んだり、勉強したりすることができるかと、父に訊いたことがあります。その返事は「それは面白いよ。現代では誰も読んだことのない仏典を読むことができるのだから」「何しろお大師様や慈雲尊者のお考えに触れることができるしね」でした。これはシルクロードのオアシス国家であるウテン（ホータン）国の言葉の仏典を解説していたためと思います。また、古い仏典を読むために東洋文庫や湯島の靈雲寺様に出かけていました。靈雲寺を建立した浄嚴和尚を非常に尊敬し、私に浄嚴和尚の名利にとらわれない素晴らしい生き方を話していました。

また、同じ分野の研究者であるご法類の二松学舎大学教授の新井慧譽師は、父の書齋を定期的に訪れ、母の手作り料理とお酒で、楽しそうに父と議論していました。母は父の勉強時間にお檀家の皆様に対応し家事をこなしていました。私は住職を継ぐまで、寺の住職の役割が、お葬式などでお経を読んでいることより、自由に学問や読書などをする少し変な人であると本当に思っていました。

しかし、父とは異なり、母と私はもう少し積極的で功利的で、勉強や研究を形にしては、つまり学位論文にしてはとか、ご推薦頂ける方がいるのですから大僧正を頂いたらと父にすすめました。

後年ですが、今から思うと父にとっては余計でおせっかいなことをしてしまったと思うと母から聞いたことがあります。母は自分の夫である私の父を、いわば文学博士にして大僧正にして、宗派の最高位の学問の位である勸学（昭和50年4月）にしたことになります。

文学博士号を頂くときには、専門家のいないウテン語の解説であることから、学位の審査をすることができる学者がいなかったと聞きました。

父の書斎は旧客殿では、玄関脇にありました。昭和49年に完成した現在の客殿では、2階にあります。現在は応接室を兼ねていますが配置を変えないようにしています。しかし、机の上には私の顕微鏡とオリベッティのタイプライターがあります。

周譽師の生活

父は明治人のためか生活はとても質素でした。師僧の清水教譽猥下の影響もあったと思いますが、食べ物について美味しいとか不味いとか聞いたことはありません。食べ物の話題はするべきではないと思っていたようです。お酒はビールと二級酒の爛酒を飲んでいました。

晩年になっても庫裡（住職の住い）の清掃をしていました。

父の服装は、福性寺の中でも外でも、戦前はもちろん昭和40年ごろまでは下着（いわゆるクラシックパンツ、越中ふんどし）を含めて和服でした。また、寺の中では、普段は前掛け（前垂れ）をつけていました。これは大きな商店の番頭や店主が身に着けていたと話していました。和服を保護するためや、袴はかまを着けない着流しにあわせるためでした。また、少しだけ伝統を知っていることやオシャレの意味もあったようです。しかし、次第に寺の中は和服でも、外出時には洋服を着るようになりました。外出から帰ると和服に着替えていました。最後まで洋服だけの生活には

なりませんでした。

父には、趣味と言えるほどのものは、なかったように思います。サンスクリットの勉強が唯一の趣味と言えそうです。ご法類の小松原賢譽殿下が年回忌法要で「先代住職（父）は無骨な人で、奥さん（雅子）の内助の功があるので福性寺はよく運営されている」と何度も話していました。

ひどい高血圧があったせいか盛夏には東京の暑さを逃れるために長野県や群馬県の温泉宿に宿泊していました。現在は知りませんが、当時としては、とても素朴な宿が多く、長野県の手ノ口温泉や群馬県の薬師温泉などです。手ノ口温泉では、新井慧譽師ご一家とひと夏を過ごしたこともあります。母は留守番でした。しかし、私が留守をすることができるようになると、両親そろって旅行を楽しんでいました。海外旅行はしたことはありません。

寺の運営に関しては、突然に亡くなったために遺言はありませんでした。私が高校生の時から盂蘭盆会のお棚経にお檀家を訪問していたこと、年回忌法要を手伝っていたこと、このため父は読経をするだけであったこと、時にお通夜を任されていたことから、そのままよいと考えていたようです。家内からの将来の寺の運営に関する質問には「自分たちのやり方で運営すればよい」と話していたとのことでした。小学生のころに、僧侶を前提として医師となることを話すと、それは面白いかもしれないというのが返事でした。高校生のころには、アンチテーゼを目指していると聞いたことがあります。

父の病気と死

元来、父は高血圧でいつも不眠と耳鳴りに悩まされていました。40歳代から亡くなるまでです。血圧は服薬しても最高血圧が140mHg、最低血圧は90でした。日本医科大学の学長木村栄一先生の外来にも行きました。特別に往診もして頂きました。しかし、この範囲を超えて何度も心不全となりました。その他の疾患は日本医科大学外科教授の代田明郎先

生にお世話になっていました。晩年は体調がやや安定してきました。

深刻な不整脈と心不全になった時に、私の将来について法類の清水淳譽大僧正にお願いしていました。本人は病気の原因を中国大陸の戦野での野宿などをあげていました。

病気の深刻な時には、ご本尊様の近くの内陣の脇部屋で就寝することがありました。

父の死は突然でした。昭和54年（1979年）10月6日の午後9時半ごろに私は埼玉県立がんセンター研究所から帰宅しました。父はすでに布団の中でした。私が帰宅を告げると、私を慰労してくれました。その夜中に母に呼ばれて父を診察すると、すでに心肺停止でした。人工呼吸などをしましたが蘇生しませんでした。

亡くなる直前は、著書「梵字悉曇（平川出版社）」を執筆中でした。執筆が途中となりましたが、大学時代の同僚であった金山正好氏に補筆してもらい発刊となりました。金山氏から「うらやましい一生でした」と言われました。最近、亡くなる数時間前まで好きな学問をすることができた点をお話になっていたと思うようになりました。金山氏は望月仏教大辞典、梵和大辞典の編纂委員です。東京都教育庁主事などを歴任されています。

密葬儀と本葬儀

密葬と本葬ともに福性寺で行いました。密葬の導師は、ご法類の鳥居敬譽猊下をお願いしました。本葬の導師は父の親友の築山定譽猊下をお願いしました。これは母の希望でした。この件を築山猊下をお願いにあがる時には、青梅市まで現在の鳥居愼譽猊下が自ら車を運転して私を連れて行って下さいました。密葬と本葬の式衆は、施餓鬼会組寺とご法類の皆様をお願いしました。

田久保周譽大僧正業績集

父の死後、一周忌に「田久保周譽大僧正業績集」を作り、内外の仏教学者に贈呈しました。当時、大正大学の学生であった故江里口治彦様(京都造形芸術大学講師)、埼玉県所沢市真言宗豊山派密蔵院島野和明師、福島県矢吹町正福寺星俊光師に父の過去の文献、特に論文を収集してもらいました。父の梵語学者としての業績を集大成しました。普段、入手が困難な論文も全て載せました。序文は父の親友である林亮海師にお願いしました。真言宗豊山派宗務総長でした。

非売品で配布しました。配布後、高野山大学、種智院大学、大正大学の教授や大学院生から非常にたくさんの本の入手の希望が来ました。

現在、インターネットの古書コーナーでそれなりの値が付けられて販売されています。このことから、社会で必要とされている本を作ったことに安心しています。

田久保周譽 著書業績集

福性寺副住職 田久保圭誉

周譽師の死後「文学博士田久保周譽大僧正業績集」田久保博士業績集刊行會（昭和55年1980年）が刊行されています。学問人としての人生の総括です。その中に業績集があります。論文業績は確定していました。しかし、遷化後に出版されたものが多くあり、著書の業績集は不完全でした。今回、確定することができました。以下に周譽師の著書の初版と令和6年末における最終版を記録しました。

業績を俯瞰しますと、「梵字入門」は今回の版を含めると五版、般若心経に関する解説書（業績4と9をあわせて）は五版、「梵字悉曇」は七版と版を重ねています。仏教原典の研究のかたわら、いわゆる布教と伝道とは異なりますが、学問的に大いに布教と伝道に役割を果たしたことがわかりました。

田久保周譽 著書業績集

- | | | |
|----------------------|-------|-------|
| 1. 批判悉曇学初版 真言豊山派宗務所刊 | 昭和19年 | 1944年 |
| 改訂増補版 真言豊山派宗務所刊 | 昭和53年 | 1978年 |
| 2. 堀船郷土史初版 堀船郷土史刊行會刊 | 昭和27年 | 1952年 |
| 平成増補版 宗教法人福性寺刊 | 平成28年 | 2016年 |
| 3. 真言陀羅尼蔵の解説初版 鹿野苑刊 | 昭和35年 | 1960年 |
| 校訂増補第3版 真言豊山派宗務所刊 | 昭和54年 | 1979年 |
| 4. 般若心経解説初版 山喜房仏書林刊 | 昭和44年 | 1969年 |
| 校訂再版 山喜房仏書林刊 | 昭和48年 | 1973年 |
| 5. 梵字入門初版 真言宗豊山派宗務所刊 | 昭和45年 | 1970年 |
| 第5版 真言宗豊山派宗務所刊 | 令和5年 | 2023年 |

- | | | | |
|-----------------------|--------------|-------|-------|
| 6. 梵文孔雀明王經 | 山喜房仏書林刊 | 昭和47年 | 1972年 |
| 7. 敦煌出土于闐語秘密經典集の研究 | 春秋社刊 | 昭和50年 | 1975年 |
| 8. 梵字悉曇初版 | 平河出版社刊 | 昭和56年 | 1981年 |
| 第7版 | 平河出版社刊 | 平成17年 | 2005年 |
| 9. 解説般若心経 (4. 般若心経解説) | 山喜房仏書林版の改訂版) | | |
| 初版 | 平河出版社刊 | 昭和58年 | 1983年 |
| 第3版 | 平河出版社刊 | 平成14年 | 2002年 |

関連著書

- | | | | |
|--------------------|----------------------|--------|-------|
| 1. 文学博士田久保周譽大僧正業績集 | 田久保博士業績集刊行會 | 昭和55年 | 1980年 |
| 2. 福性寺の歴史初版 | | 平成25年 | 2013年 |
| 第9版 | 照良和尚百三回忌周譽和尚四十三回忌記念版 | 令和6年 | 2024年 |
| 3. 上東野照良師百回忌 | 田久保周譽師五十回忌記念誌 | 田久保圭誉編 | |
| 福性寺刊 | | 令和6年 | 2024年 |

参考図書

- | | | | |
|----------------------------------|---------|-------|-------|
| 1. 真性寺法類会編：鳥居敬譽猥下米寿記念法流文集 | 真性寺法類会刊 | 昭和60年 | 5月18日 |
| 2. 真性寺法類会編：小松原賢譽猥下報恩法流文集 | 真性寺法類会刊 | 平成8年 | 1月22日 |
| 3. 眞性寺法類会編：鳥居愼譽猥下講演録 | 眞性寺法類会刊 | 平成23年 | 4月1日 |
| 4. 眞性寺法類会編：清水教譽猥下報恩清水淳譽大僧正報恩法流文集 | 眞性寺法類会刊 | 平成29年 | 6月18日 |

あとがきにかえて

福性寺副住職 田久保圭誉

上東野照良師の百回忌と田久保周譽師の五十回忌にあたり、以下の事業を行いました。

田久保周譽著「梵字入門第五版」を真言宗豊山派の要職にある皆様、ご法類寺院と東京第二号宗務支所下寺院様に300部余を配布しました。

福性寺刊「福性寺の歴史第9版 照良和尚百三回忌 周譽和尚五十回忌記念版」を1000部発行し、真言宗豊山派の要職にある皆様とご法類に200部余とお檀家、ご信徒、町会の皆様に800部を配布しました。

追善法要、椿山荘での清宴と抒情歌・昭和歌謡のコンサートを開きました。

周譽師筆「光明真言織り込み如法衣」を30領配布しました。

この照良師百回忌 周譽師五十回忌記念誌を1000部作り、この中で周譽師の著書業績を確定しました。また、真言宗豊山派の要職にある皆様に250部を配布しました。

以上は、ご本尊様、弘法大師様のお陰でございます。さらに、施餓鬼会組寺様、ご法類寺院様とお檀家の皆様のお力によります。心からお礼を申し上げます。

施餓鬼会組寺様、ご法類様とお檀家の皆様のご多幸をお祈り申し上げます。

上東野照良師百回忌 田久保周譽師五十回忌記念誌

第一刷発行 令和六年十二月十五日

第二刷発行 令和七年十月六日

編著者 田久保圭誉

発行 宗教法人 真言宗豊山派福性寺

〒114-0004 東京都北区堀船3-10-16

電話 03(3911)7701

FAX 03(3911)7702

Email : fukushoji.horifune@gmail.com

<http://fukushoji-horifune.net/>

印刷所 社会福祉法人東京コロニー コロニー印刷

〒165-0023 東京都中野区江原町2-6-7

電話 03(3953)3536

FAX 03(3951)9163

© Fukushōji Temple 2024



景



明治三十二年九月五日